

たまなし  
玉名市  
マップ



〈参考文献、図・写真出典〉  
 ■『高瀬船着場跡関連遺跡』玉名市文化財調査報告第42集 2019年 玉名市教育委員会  
 ■『市制20周年記念 玉名市の文化財総集編』1975年 玉名市教育委員会  
 ■『玉名市史通史篇上巻』2005年 玉名市

〈制作〉令和5年(2023) 玉名市  
 〈問い合わせ先〉  
 〒865-8501 熊本県玉名市岩崎163  
 玉名市教育委員会教育部文化課  
 TEL:0968-75-1136 FAX:0968-75-1138  
 玉名市 HP:http://city.tamana.lg.jp/



玉名の町並みと菊池川

<https://www.kikuchigawa.jp/>

菊池川流域 日本遺産 検索

菊池川流域日本遺産公式サイト



玉名市マスコット「タマにゃん」

祝 国指定史跡

くまもとはん たかせ こめぐら あと  
**熊本藩高瀬米蔵跡**

たかせおくらあと たかせふなつきばあと さらしふなつきばあと  
 高瀬御蔵跡・高瀬船着場跡・晒船着場跡



菊池川流域二千年にわたる米作り文化の構成文化財です



大浜外嶋宮住吉神社奉納絵馬レプリカ (玉名市立歴史博物館こころピア展示)



高瀬船着場跡 (新渡頭)



高瀬船着場跡 (旧渡頭)



晒船着場跡

令和4年(2022)6月17日、国の文化審議会は、熊本県玉名市にある高瀬御蔵跡、高瀬船着場跡、晒船着場跡の遺跡を「熊本藩高瀬米蔵跡」として国の史跡に指定するよう答申しました。

日本遺産に認定されている菊池川流域の米作り文化と、歴史の道百選にも選定されている菊池川の水運を象徴する遺跡であり、河と共に発展した玉名地域の歴史を物語る重要な遺跡として評価されました。

JAPAN HERITAGE



菊池川下流域全体図

玉名地域の中心に位置する高瀬は、菊池川河口の港として栄えた町です。古くは有明海を介して、海外との交流の窓口になっていました。江戸船山古墳や大坊古墳などからは、朝鮮半島からもたらされた金製耳飾りが出土しています。菊池川流域の豊かな森林資源や刀剣などは、高瀬の港から海外へ輸出され、有力武士団であった菊池氏の繁栄をもたらしました。菊池川からは大陸から輸入された陶磁器が見つかります。また、海外からは宋や明の高僧やキリスト教の宣教師なども訪れています。

加藤清正公は肥後に入国後、各地で新田開発を行い、菊池川下流域では、西塘と東塘、石塘を築造し、塘下600町とよばれる新田が誕生したと伝えられています。また河川整備を行い高瀬から大浜、晒経由の現在の流路に固定し、菊池川の水運の中で大浜と晒が重要な役割を担うようになりました。

高瀬では加藤、細川氏時代に高瀬御茶屋、高瀬御蔵の整備が進み、川尻、高橋とともに熊本藩の重要な港町として位置

付けられ、熊本、八代の両城下町とあわせ五か町として別格とされていました。町奉行がおかれ、有力な商人たちが町を治めていました。

寛永14年島原の乱以後には晒と大浜に御番所が設置されました。鉄砲や弓、槍が備えられ、外国船などからの河口周辺警備のために整備されました。

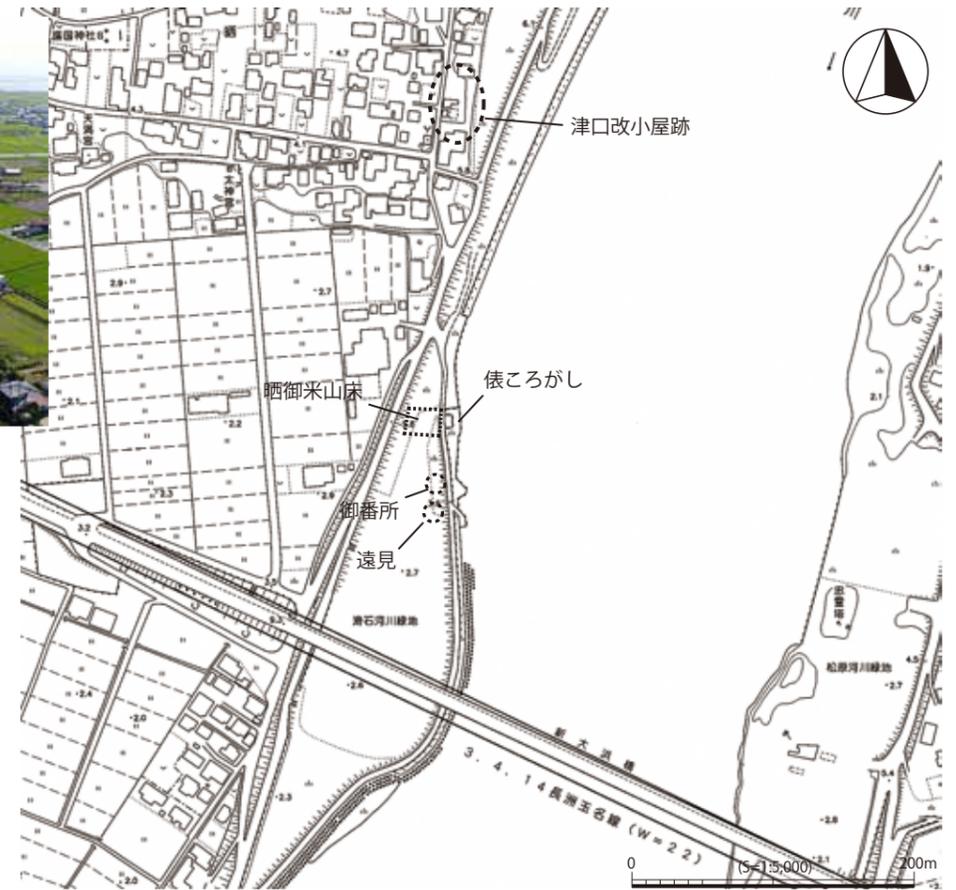
江戸時代を通じて、高瀬、大浜、晒は菊池川水運を担う拠点として機能し、発展していきました。



高瀬船着場跡周辺

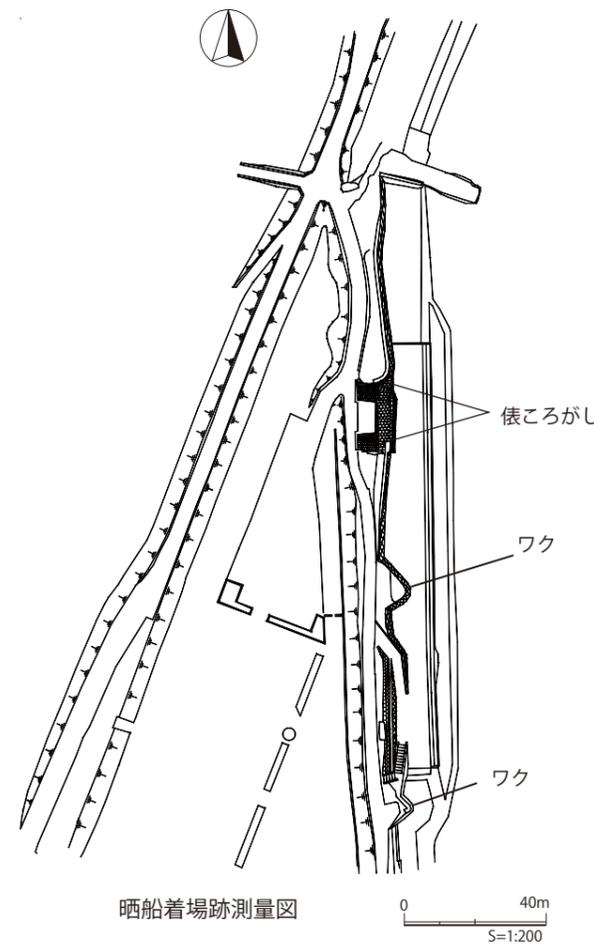


晒船着場跡周辺（北から）



晒船着場跡周辺図

「ワク」とは…  
 刎（ハネ）、脇（ワク）などとい、堤防から川の中に突き出た石造の構造物で、護岸や川の流れを制御する機能を持つ。



晒船着場跡測量図



安政年間（1855～1860）作成『菊池川全図』の晒部分（『玉名市史資料篇1 絵図・地図』から転載）

## ■菊池川水運の玄関口、晒と大浜

菊池川左岸の最も下流部の河口付近に位置する晒は、流域外からは菊池川の玄関口として、流域内からは水運の終着点として重要な役割を果たした地点です。

寛永16年(1634)に川口番所が置かれ、のち晒番所として、鉄砲・槍などが配備されました。津口改小屋では、川への通行に必要な許可証である「川口出入札」を示す必要があり、坂下手永の惣庄屋から発給され、通行の管理が行われました。文化5年(1808)には、川床が浅くなり海辺の村々から高瀬御蔵まで遡るのが困難になっていたことから、晒に御米山床が設置されました。その後天保5年(1835)には高瀬御蔵の補助として機能させるために順次整備され、海岸沿いの村々からの年貢米が集められました。また晒沖で年貢米輸送のために平田船からより大型の廻船へ積み替られ、輸送の中継地として重要な役割を果たすようになりました。

安政年間作成の『菊池川全図』の晒周辺には、堤防沿に上流から津口改小屋、ワク1基、俵ころがし、ワク2基が記載され、堤防内には俵ころがしに隣接して「晒御米山床」、下流のワク2基付近に「御番所」、「遠見」の施設が描かれています。現在の川岸は約200mほどが船着場として整備されており、このうち俵ころがし1基と、下流側のワクが2基残存しています。俵ころがしは、石畳が北側と南側に2基整備されています。

晒船着場が所在する地点は、菊池川とその支流の境川が合流するところでした。境川は、昭和の初め頃には流路が変更され、菊池川には合流せず、直接有明海に入る流路に整備されました。

対岸の大浜は、廻船問屋街が形成され、高瀬とともに水運を担う港町として栄えました。現在も白壁の土蔵造り建物が残っており、往時の繁栄ぶりを物語っています。



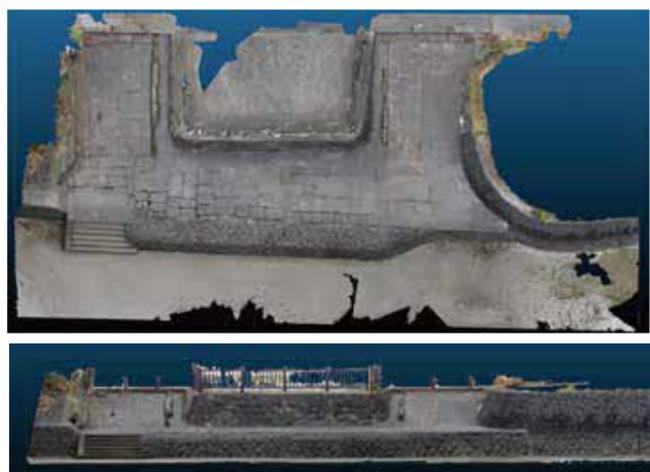
晒船着場跡全景(南から)



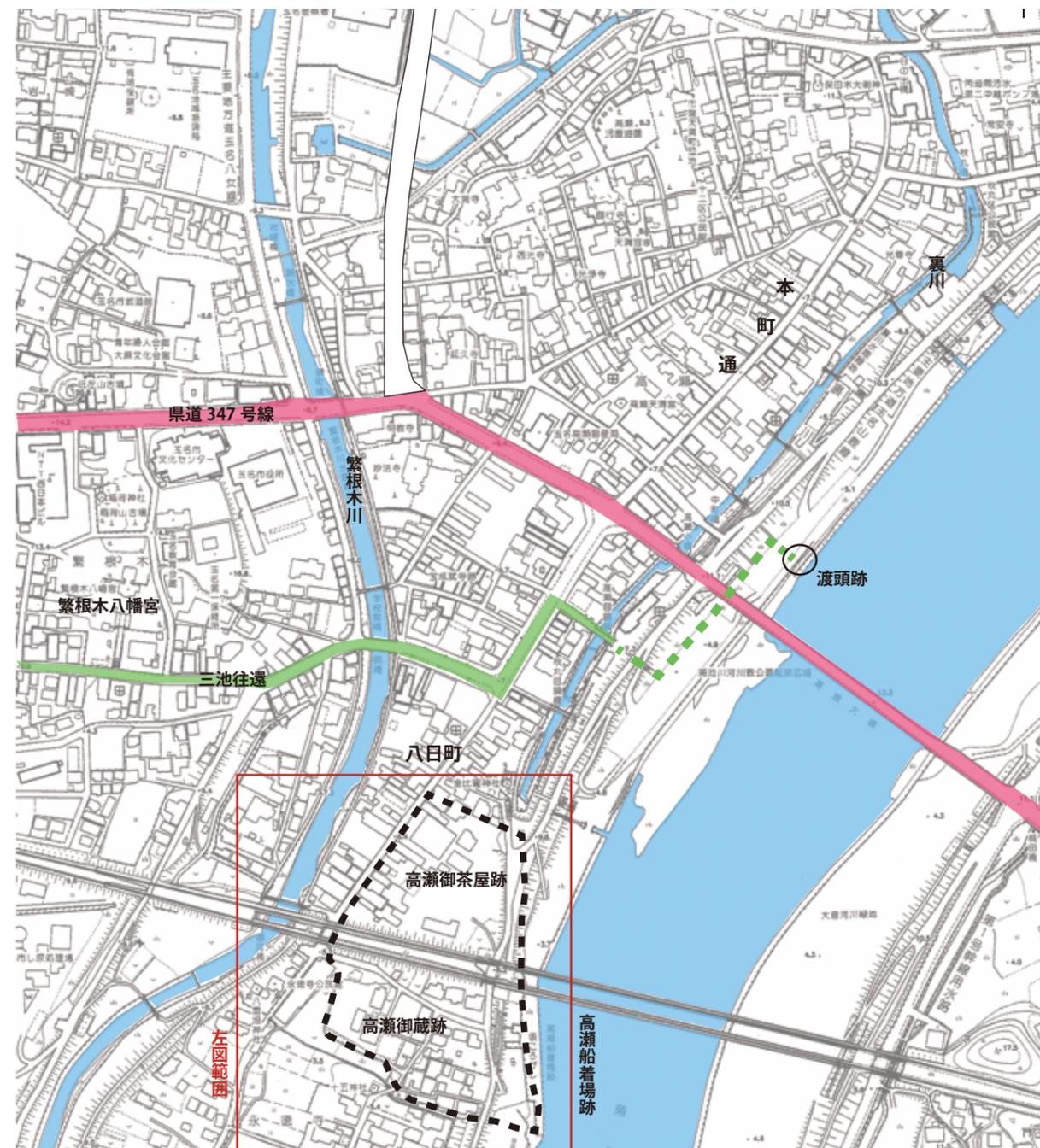
晒船着場跡の俵ころがし(東から)



晒船着場跡の俵ころがし(南から)



晒船着場跡三次元計測から作成した画像



高瀬地区全体図

0 S=1:5000 200m



高瀬船着場跡新渡頭(南から)



高瀬船着場跡旧渡頭(北から)

